

# 灯



人を征服者の目線で見ていたのだと思う。

8月15日が近づいた。少々昔話だが、サンフランシスコ講和条約は締結されたがまだ進駐軍による支配が色濃く残っていた昭和30年頃、時々米軍の戦車などが列車で搬送されていた。当時、九重町豊後中

戦争に負けはしたが日本人として矜持は失うな、という思いが大声を出させたのだろう。私は拾う前に踏みとどまった。夕食時に母がなぜ大声を出したか教えてくれた。小学生だった私にもよく理解できる話だった。

村駅近くに住んでいたの車両近くまで行くと、米兵が何かをくれた。香りがよいので仲間がかじると米兵が大笑い。せ



草野 義輔

「戦争には負けたが進駐軍がソ連ではなくアメリカでよかった」「マッカーサー元帥が昭和天皇の言葉に感激した」等

間がかじると米兵が大笑い。せ

々、母が語っていたのを思い出す。話せない英語教育は教育ではない、と主張していた英語教師の母は、外国人と見ればすぐに話し掛けるくらい、当時の日本人としては異色の存在だった。しかし生粋の日本人だったと、今振り返ってしみじみ思う。

表通りでも米軍のジーブやトラックが通る。菓子や時にはお金をばらまく。日本人が押し寄せ拾おうとする。そのとき「拾うな！」と周囲を制する大きな声が響いた。母である。車上の米兵たちは笑いながら餌をまくくらいの感じで、殺到する日本

市）  
（昭和学園高校理事長・日田